

うたのある風景

大岡 信

日本経済新聞社

うたのある風景

昭和六十一年九月二十二日 一刷

著者 大 岡 信

© Makoto Ooka, 1986

発行者 前 田 哲 司

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一の九の五 千一〇〇
電話〇三二七〇一〇二五一 振替東京三二五五五

印刷 奥村印刷 製本 牧製本

ISBN4-532-09426-7

うたのある風景
目次

うたのある風景

暦 11

紅梅白梅 14

朝の光 18

春雨 21

歌垣 25

旧制高校時代 28

夏は来ぬ 31

鵜飼 35

沙羅の木	38
小さな生物	42
おくの細道	46
地方文人	49
月見草	52
秋の気配	55
遊君の歌謡	58
秋風立つ	61
あえかなるもの	65
娘の結婚	68
沈黙の魅力	71
愛誦詩	75
朝霧	79
お酉さま	82

風のまにまに

しぐれ 85

月と酒 88

カラマツ 91

雪の後 95

キモノ考 101

年賀状ばなし 104

筆記具考 107

オペラばなし 110

死にかた考 113

雲鈴法師ばなし 116

辞世・絶筆考 119

「間」抜けばなし	122
ミドリ考	125
相撲ばなし	128
唱歌考	131
童謡考	134
春眠ばなし	137
「愉快」考	141
草笛ばなし	144
多作考	147
へなぶりばなし	150
若妻考	153
文字ばなし	156
うらばなし	159
産み分け考	162

フアド考 165

絵と心臓ばなし 168

合わす考 171

心のふるさと

深大寺界限 177

銀座運河 181

地方色 185

わが沼津 188

幼き日のこと 193

三嶋大社の夏祭り 197

箱根が私にくれたもの 202

不思議な縁 205

父親というもの	209
高橋は同級生、されど……	212
尺八を吹くアメリカ人	215
本屋さん	222
近代芸術家の書	229
新春のうた	235
マザー・グースのうた	242
朝の少女に捧げるうた	247
辞世の歌・龍馬の歌	252

うたのある風景

曆

初曆知らぬ月日の美しく

吉屋信子

曆については遠い思い出がある。「三島曆」というものが昔あった。説明の便宜上、辞書を引いてみる。

「室町時代、応安年間（一三六八―七五）から、伊豆国（静岡県）の三島神社の下社家河合氏で発行した、きわめて細かな仮名で記した曆。江戸時代には幕府の許可を得て、伊豆・相模（神奈川県）の二国に行なわれた。また、こまごました文字で書いたものたとえにも用いる。三島摺曆。」（小学館「日本国語大辞典」）

三島曆の複製図版をどこかでごらんになったことのある人なら、辞書の説明が一層具体的に目に浮かぶはずである。焼物でも高麗焼の陶器の「三島手」というスタイルのもの、これも三島曆の仮名文字に似て縦に細くうねうねした文様があるため、その呼び名が生じたという説がある。

私の遠い思い出というのは、実は右の説明文に多少関わりがある。「三島神社の下社 家河合氏」が三島曆を摺って発行していたと文中にあるが、その河合氏の家の庭で、私は戦中・戦後の中学生時代、よく遊んだのだった。河合家の血筋につながる同学年の親友がいて、この家に住んでいたためである。殺風景な時代だったから、喧嘩をするときにはどんな武器をあつかうのが得か、などということをし、二、三の友人たちと共に、この家の広い庭で実技をまじえながら議論したりもしていただろう。そんな折、この大きな旧家の軒下や倉の周囲に、黒ずんだ平たい大きな板をいくつも見たような記憶がある。気にもとめなかったが、われわれの家の軒下にはそんな板は一つもないのだった。ずっと後年になって、三島曆のことを知った。人づてにきいた所では、あれら三島曆の版本は、今ではほとんど散逸してしまっただけらしい。

昔の人々は、現代のわれわれよりもずっと新鮮な思いをもって、新年のまあたらしい暦、「初暦」を眺めたことだろう。木版刷りだし、しかも三島暦のようにある特定の家が暦作製の名誉をになう場合が多かつたはずだから、町に出まわった初暦をめくる感興も大きかつたに違いない。元日から始めて三百六十五日、まさに「知らぬ月日の美しく」、るいいるいと並んでいるいまだ来らざる日々。正月というものの面白さがそんなところにもあつた。

元来、暦というものにはどこかしら神秘的なものがあつた。「日を知る」人、つまり天文暦数のことを深く知っている人のことを、「日知り」すなわち「聖」といったのだという説もあるくらいである。

実をいえば、現代人にもその感覚は根強く、深く生きている。近年の占いブームも、つまるところ暦への執着にほかならないともいえる。多種多様、工夫をこらしたカレンダーが、まあどこへぶら下げたらしいのか分らないくらいに溜ってしまふ昨今だが、それでも勢いが一向衰えないのは、来るべき一年の「知らぬ月日」が「美しく」あることを、せめて一月という月の間位は信じたい思いがみんなにあるからかもしれない。

紅梅白梅

白梅のあと紅梅の深空あり

飯田龍太

詩とか歌とかいうものが生まれるきっかけはさまざまである。しかしそこには何らかの意味で、今まで気づかずにいたことに気づいた驚きとか喜びが種になっている場合が多い。本来なら同じ時期にいつせいに咲くはずの同種類の花が、ほんの少し場所が違っただけで開花に時間の差ができるといった程度のことさえ、十分に詩の素材となった。

東岸西岸の柳 遅速同じからず